

社長令嬢・テンジヨウミサトはまだ14になったばかりの、人間としては社会の右も左もわからないようなまだ年端のいかない少女であった。どちらかというと小柄ではあるが、質のいいものを食べさせてもらっているだろうことは彼女の思春期にもかかわらずつるりとした肌が物語っていたし、衣服も（カソリックであり清貧志向があると噂の私立の女の制服を除けば）非常にいいものを着せられていた。黒を基調としたワンピースタイプの制服からよきと生えている細い手足に学生らしい日焼けの跡は見られず、爪先は毎日やすりあてでもしているかのようにきれいな貝の形をしていた。つまり、社長であるテンジヨウタダヒトそのひとに、非常に非常に可愛がられていることは、一目瞭然だったのだ。

「というわけなんだよ、君にここにおいでなすっていただいたのは」

「――はあっ!？」

「いやはや思いのほか随分と気性がお荒いようだ? うんまあでもあのシャチョーの娘らしくてとてもいい、とてもいいねえほんと」

娘は何度も何度も後ろ手に縛られた自身の両手首をねじりなんとか少しでもその麻縄に抜け出る隙間でも生み出せないかと奮闘していたが、ただ柔肌に赤切れを増やしただけで徒労に終わっていた。それでも反抗的な瞳に宿った憤怒が恐怖に変わることはなく、見知らぬ男に突然攫われた少女としては、珍しくくらいに気骨があった。

「たしかにね、わたくしはお父様にたいへん気に入られてるわ。私は勉強も常に学年1をキープしていますし、無駄な火遊びなんかいたしませんもの。立派なお父様の期待に応えられるよう物心ついた折からわたくし、努力してまいりました。可愛がられて当然の努力をね」

自らの努力に随分と矜持が高いのだろう、ふん、と強く鼻息を出して、少しでも見目好くしようとも思ったのか、縛られた状態なりに背筋を伸ばして見せた。彼はそれをにこにこ破顔しながら眺めた。彼女はそのまま場違いさに少々怯んだように目をすがめた。

「――だから、金銭を要求するのであれば、さっさとなさい。お父様はきつと言いついで払ってくださいなわ。わたくし、やるべきことが山積みなんですの。来週には夏期講習がはじまりますし、毎日のピアノレッスンもありますの。そういうのって1日遅れば取り戻すのに3日かかるというわれているんですよ」

「ああーなるほどそれはおかしいように」

「そ――わ、わかっていただけなら早く――」

「うんうん、僕も君がこの後日常に健全な姿で帰っていけるのか、それはとても気になっている。非常に興味深いサンプルデータが取れそうだ」

「は――?」

男がおもむろにがたりと大きな音を立てて立ち上がったので、さしもの少女もびくりと体を揺らした。男は部屋の隅に転がされたトランクを開き、たくさんのコードを引き連れて戻ってきた。それらひとつひとつを、部屋のあちこちに置かれた機材に丁寧につないでいく。最後にデスクトップパソコンの電源を入れ、また元の位置に戻ってきた。

「見ての通り僕はサイエンティストでね、あ、見えないって？まあ白衣を脱げばどんな科学者もそこらへんのおっさんと変わりやしない。ともかく、僕の専門はね、電気だよ。電気といってもとっても微弱な電気さ。人間の体の中を通っているようなね。つまり、神経伝達の研究をしていたのさ。ちよつとは授業にでたかな、こういうの？うんまあでも、中学そこで詳しく習うようなことじゃない。だから、説明するより身をもって体感していただいたほうが早いかなと思うんだよね」

男はミサトににじり寄って、小さなキャップ状のものを差し出した。ミサトは上体を反らして、少しでも男から距離を取ろうとする。しかしそんな抵抗もむなしく、男はミサトに抱き着くような態勢になりながら、そのキャップを後ろ手に回されたミサトの人差し指にはめた。男が身を引くとミサトの嫌悪に歪んだ顔が至近に見えた。よほど不快だったらしい。それはそうだろう。彼女はこんなおっさんに抱きつかれていいはずの生まれではないのだ。男はひひと笑った。少女の眉間の皺はなお深くなった。

「さあさ、おたちあいおたちあい。世紀の実験がはじまります。はい、ぼちっとな」

男はやおら明るく宣言したと思うと、なんら脈絡なく卓上のキーボードのエンターキーを押した。

「あっ！？」

「うんうん、ちよーつとぴりつと来たねえ。それ静電気が起こった時の刺激ね。そんな痛くないでしょ。僕痛いのは嫌いなんだよ。他人が痛がつてるのも駄目ね。だから生物系の実験全般嫌いだったさ。まあ今は昔。じゃ、次これね。ぼちっとな」

「んんー？不思議な表情だね。うんうん、いいよお、わかるね、それ、快樂信号ってやつさ。じわじわしびれて心地よいだろう。ミサトちゃんは経験あるかな？大好きな人とちよちよ、と指先が触れた時のあまやかあな感觸。お互いがお互いの遺伝子の理解しあう感觸。その疑似体験ってわけさ。はっはー、さぞ心地よいのだね。頬が赤くなっている」

「ば——ばかじゃないの、こんなのばかっぽい、子供のばかみたいなのジョークグッズ——」

少女はとにかく反抗したかったのだらう無意味な罵倒を繰り返した。

「そう、思ukai？ほんとうに？きみあまだ人間ってやつがどれだけ快樂に脆いか知らないんだろうなあ。いいねえ、実にいいサンプルだ。まあでも、実際ジョークグッズみたいなもんさ、こんなもの。本体のほうは君のお父様にぶんどられっちまったからねえ」

「い——いいから、はずしなさいよ、これ！」

男のセリフなど頭に入っていないのだろう、少女は身をよじりながら焦ったように大声を上げた。男はそれをやにやと見下ろし、じらすように少女の周囲を歩き始めた。

「どうしようかなあ。ほんとうに外してほしい？」

「あ、当たり前でしょ。こんなの、気持ち悪い。不快です。失敗作です。ど、どうせこんなのばっかり作ってたからお父様にクビにされて逆恨みしてるんだわ、そうでしょ——この、変態」

少女の誹りを聞いて、男はけけけけと哄笑をあげた。大げさに上体を反らして天を仰いだ後、仰々しく腰に手を当てお辞儀するように深く首を垂れた。

「おもしろい——実におもしろい。いいねえ、これで僕も慈悲なく徹底的にやれるってもんだ。え？なに？ごめんね怖かった？だいじょうぶ痛いことはないよ、言ったでしょ。僕あ痛いのが嫌いなんだ、死ぬほだね。大丈夫さ。ほらこれ、取ってあげるよ。それでね、君、ほらこれに座りなよ、ずっと地べたじゃ辛いだろう？そうそう、ほら、抵抗しないで？いーこいーこ」

男は半ば無理やり少女を引き起こして、自身が座っていた椅子に座らせ、足首を椅子の脚部に固定した。どちらかというと柔和な雰囲気だった男の豹変に、少女の緊張感かなり高まったのがわかる。

「じゃ、失礼しますよ」

「きゃあっ!？」

おもむろに少女のスカートをまくり上げた。少女は両太もをしっかと閉じ、上体がかがめ、その奥が見えないように、必死に抵抗する。

「や、やめ、やめて!こんなことして、ただですむと思ってるの!？は、犯罪なんだから。子供にそういうことする犯罪者は、け、刑務所でもいいめられて、だから、やめ、てっ!やだ!」

じたばたと暴れる足をおさえつけ、男は淡々と、一切の躊躇なくその奥の下着を引きずり下ろした。

「あああ!！」

少女は顔を真っ赤に染め、ほたほたと落涙する。男は腕を広げておどけてみせた。

「さあおたちあいおたちあい、世紀の実験だよ。取り出したりしますはこの快楽信号発信装置——!さあてミサトちゃん、女の人の、いっちばーん快楽神経が密集してるとこ、どこかわかるかなー?」

男のセリフに、少女はさあつと青ざめる。赤くなったり青くなったりと忙しないことだ。瞳がきょどきょどと彷徨って、彼女のろうばいぶりを表していた。「ミサトちゃんみたいな幼い子にはまだわからないかなあ。火遊びなんてしないもんね?そうだね?夜にこっそりベッドの中でそれをいじったりこすったりこねくりまわしたり——なあんて、しないよね?」

「あ——あたりまえです、そんな、破廉恥なこと——」

それはどちらかというと自供に等しかったが、男はあえて追及はしなかった。にたりと笑みを深くして、少女の膝頭に手を添える。

「じゃーあおにいさんが教えてあげようー。ほおら、足を開いてごらん、そーう、いいこいいこ、いいねえ、のりのりだねえ、ミサトちゃんもやつぱりこういうことに興味があるお年頃なんだねえ」

実際は完全に無理やり押さえつけ、その両足を押し広げているにもかかわらず、男はそう揶揄してミサトをさらに羞恥させた。完全に開脚させ、スカートはへその位置までまくり上げられる。少女は精いっぱい抵抗に顔を反らして目をきつくつむった。

「ほうら、見えました。ミサトちゃんのかーわいいクリトリス。おやおやー?どうもこれは…勃起、してますねえ。」

「やめて!見るな!変態!」

陰唇を押し広げると、真っ赤な秘肉の割れ目からよきつと突起が飛び出していた。完全に充血して勃起している。そこからむわりと立つ秘所のおいが鼻先をくすぐった。いっばしにメスの匂いをしている。

「しかもこれは…ひじょうにぬれぬれ！いやらしい液でべっちゃり！みんなー？見えるかなー？」
男が唐突に虚空に向かって語り掛けるので少女はぎょっとして男を凝視した。

「は……？なにを……」

「うんうん、今ねえ、世界中の人が僕と視界を共有してるのさ。実はこれって伊達メガネなんだよね」

男はくいつと、眼鏡を指先で鼻梁にかけなおす。幾度かぱちくりと瞬きをし、理解できない——否、脳が理解を拒否したのだろう、少女はこてんと首を傾げ、それからゆっくりと男の言葉の意味を飲み込み、途端に今までの気丈な表情を崩して14歳の少女らしい初心な顔つきになった。子供が駄々をこねるとき特有の、くしゃくしゃの表情を浮かばせる。

「うそ！うそ！うそ！うそ、やだ！！」

激しく頭をふってぼたぼたと涙を流した。股を大開にしてするそのみっともない表情は、男の嗜虐趣味を満足させるものがあつた。少女の脳裏には今まさに破滅に向かって自身の将来がまざまざと映っているのだろう。世界中の男が自身の陰部のピクチャーをシェアしている。一生消せないデジタルタトゥー。さしもの中学生にもその意味の重さはわかるらしい。

「あーうそうそだから泣かないで。ごめんね、いじわるだったね。うんうん、うそだよほんと、ね？」

男は一転優し気な声色でなだめた。差し伸べられるものであれば藁でもいいわしの頭でも有難がつて首を垂れそうなほど少女は焦燥をあらわに男にすり寄る。
「え？え？うそ？ほんと？うそ？ほんとに？」

「うーん、どうだろうねえ？あつはは、おもしろ」

少女は混乱し、目を白黒させて、わななきながら、そのまま声もなくぐすりぐすり鼻をすすり始めた。本当に無垢な泣き方だ。この泣き顔を見れば、きつとあの尊大な社長様もうろたえて泣き止ませるためになんでもしてやりたくなるだろう。それほど胸を打つ光景だった。その顔をたつぷり時間をかけて眺め、それから下腹部と、それに付属しているものろの性器に視線をうつす。これだけあけないような少女に、大人顔負けのいやらしいものがついているのはなんともアンバランスで背德的な気がした。

「じゃ、時間もそんなにたつぷりあるわけじゃあないしさ、はじめるよ。わかるね？なにされるかなんてさ、君頭いいもんね、学年1だもんね、すごいね、今この場ではちっとも役に立たない肩書だけでもさ。でもそんな君がバカになっちゃう姿って、きつとすっごく『役に立つ』んだろなあ、いろんなひとにとってさ」

男はなおも言葉で責め立て、少女を羞恥させる。一般的な14の少女にどれだけ性知識があるのかは男には知れないが——なにしろ男には少女だった時分などないのだから——見たところミサトはそれなりに知的好奇心の旺盛な青春を一通り送っているようだった。

「やだあ——」

少女もはや反抗心を手放して、ただいやいやと小さく頭を振った。

「でもさあ、君もけつこういける口でしょ。指先に快楽信号流しただけでこんなにフル勃起させてびしょ濡れにしちゃってさあ。いやあ女性の体ってなあ、すごいなあ、こんな非倫理的な実験、日本じゃそうそうかなわないもんね」

キャップを少女の視界に一度入るように突き付けて、それからゆっくりと陰部に近づける。拒絶もあらわな表情とは裏腹に、少女の陰部はひくついてなにかを期待しているかのように蠢いた。男がひゅうつと口笛を鳴らすと、それを自覚したのかミサトはさらに唇を固く引き結んで渋面を作った。

男はがっしりとミサトが微動だにできないほど強く太ももを押さえつけ、左手の親指と中指でクリトリス周辺の皮膚を広げ、完全にむき出しになったクリトリスの皮を人差し指で丁寧に剥く。それは実に簡単に剥けたので、普段ミサトがどのような自慰行為を行っているかが容易に知れた。男はそれほど小さくないそれにびったりと吸着するように丁寧にキャップをはめる。クリトリスの先端に触れる瞬間、ミサトの体はびくりと大きくはね、じわりと愛液をこぼした。ふるふると内ももが震え、尿道口周辺の筋肉がぎゅぎゅつとしまる。こんなにじっくりと女性器のそぶりを観察するのははじめてだった。ミサトとはまったく別の意思を持っているかのように、些細な刺激にいちいち反応を返す。――犬のしっぽみたいだな、まるで――男は思わず失笑する。

「うん、接続は良好――じゃ、外れちゃわないように根元を固定するね。ただでさえぬるぬるで指もひかかりやすいもんなあ。今どきの中学生ってみんなこうなの？それともあれかな、神学少女特有のやつ？普段我慢してる奴ほどやばいっていうあれ？センセイにはなんて教わってるの？清く正しく生きて神の国に招かれよ？――おっとと失敬失敬、おやおやまだにらみつける余裕があるなんて」

少女が急に面をあげ、射るような目つきで男をねめつけた。どうやら親から押し付けられたお仕着せの宗教ではないようだ。今まで萎えていた反骨心がまたぞろわきあがってきたらしい。

「おまえなんかには、何もわからないわよ」

ミサトは低い声で男をそう突きはなした。

そうこなくて、と男は思った。これを完膚なきまでに粉々に壊してこそ復讐は達成されるのだ。どれだけ勇気を振り絞っても、どれだけ相手が悪辣でただただ自分が正義のがわにいたとしても、圧倒的力関係の前では、ぶたれてぶたれて地べたをなめて許しを請うしかないということを、彼女の人生に刻みつけてやるのだ。どんなに死ぬ気で努力しても、相手の思い付き相手の悪戯相手の気分次第ですべてが無駄になるのだと、そういった敗北感を彼女の精神に理解させる。

男は肩をすくめることで彼女に返答した。――そりゃごもつともで。

男は懐からいくつかの金具を取り出して、金属のわっかをキャップの根本――クリトリスの根元を縛るように括り付ける。ネジでぎゅつと経口を調節して、クリトリスがさらに肉の内からそそり立つように根元深くにはめ込んだ。ミサトは身をよじってその不快感から逃れようとするが、かまわず男は次の作業に移る。わっかのネジ部にごく細い棒状の金属とつながった細かいチェーンを取り付け、その棒状の金属をそつと少女に見えるようにわざわざ持ち上げて見せた。

「これ、どうすると思う？」

「え――」

男は返答を待たずに尿道口にそれを押し当てた。

「あ！？ あっ、 あっ あっ！！」

ミサトが自らの穴が侵略されているということがまざまざと知覚できるようにわざとゆっくりとそれを押し込んでいく。ミサトは感じたことがない内壁の感触に脂汗のようなものをうかべながらぶるぶると腰を震えさせた。

「さーあ、もうちよつと、あと」センチー」

「ひ、い、いっ、い、いっ」

「え？気持ちいいの？ミサトちゃんすごいね、変態の素質たっぷりw」

「ぢがっ」

「だいじょぶだいじょぶこもおいおい快楽神経が発達するから。女性のま○こはどんなところでもそういうふうになるようにできるてるんだ」
適当なことを嘯きながら男は最後の最後まで金属の杭を尿道に埋め込んだ。それからあまったチェーンの部分を取り払って、クリトリスのキャップの金具と尿道口の棒が完全にぎっちり固定されるくらいにきつく締める。

「ミサトちゃんはどう知ってると思うけど、女性器ってのは快感を感じるとここの筋肉を締め上げて尿道口を閉じる性質があるんだ。だからミサトちゃんが快楽を感じてどれだけ暴れても、この差し込んだ棒をこのかわいい尿道口ちゃんががっちりしめつけてこの装置を固定してくれるってわけ。あ、でも大丈夫。ちゃんと棒の中心には空洞があって、ミサトちゃんが潮を吹きたくなったら通るようになってるからね。心配しなくていいよ」
男がことさら丁寧の説明を重ねると、ミサトは歯をむき出しにして男を怒鳴りつけた。

「この、クズ！！女性の体を玩具にして、それで自尊心を満たして、惨めよ。この一時のために人生棒に振って一生涯で生きるんだわ。でも仕方ないわよね。脳みそが足りないんだもの。品性も足りない。根性も足りない。生まれながらの失敗作ね。お母さまが泣くんじゃないの？こんな子供を辱めて勝ち誇って、そんなことをさせるために痛みを我慢しておまえなんかを産むんじゃないかってね！！お前を産んだくそ女ごと地獄に落ちろ！！！」

「あーあーはいはい。わかったわかった。じゃ、はじめね」

男はすつと真顔になり身を引いて、パソコンの前に移動した。今まで少なからず興奮や好奇心の見え隠れしていた瞳は何の感情も抱かないモルモットを見るやうな科学者のそれになった。ぱたぱたとキーを叩いて設定項目をいじる。

「本当ならねえ、コースを選ばせようと思っていたんだ。じっくりゆるゆると登山していくような初心者用コースか、あるいはきちんと小休憩をはさんだ適度なトレーニングコース。相手は中学生だしね。人生を壊すにしてもさ、その過程もちゃんと楽しんでもらおうと思ったんだぜ？まあもちろん最後は泣き叫んで許しを請うてもらわなきゃならんのけどもさ。はーあ、やれやれ。それじゃ、最初からフルスイングでぶん殴るつもりでいくから、頑張っただね。――さて、今温情を請う気はある？」

「ないわ。耐えてやるわよ。なによ、たかだかぴりぴり電気を流す程度のことを御大層に。ばっかばかしい。そんな程度で天上家の人間を屈服させられるとほんきで思ってるの？本物の人間はね、おまえみたいに怠惰で快楽に流されるだけ流されて、それで努力して上り詰めた人間に筋違いの逆恨みをする生き物じゃないの。強い精神と清廉な心があればどんな悪魔の誘惑にだって靡いたりなんかしないのよ。証明して差し上げる。あとで泣いて許しを請うのはおまえよ」

「そう、じゃ、失礼して。」

スイッチを切る。スイッチを入れる。スイッチを切る。スイッチを入れる。ミサトはスイッチを入れた瞬間、面白いくらい一瞬で激しく絶頂する。スイッチを切る。スイッチを入れる。スイッチを切る。スイッチを入れる。繰り返すたびにミサトの表情がどんどん崩れていく。眼球は上を向き、鼻汁が垂る。全身から汗を噴出させながら、まんこからまん汁をあふれさせる。

たっぷりそれを30回程度繰り返したところで、男はようやくスイッチを切りっぱなしにした。

「こ、は、あ、く、は、あ、あ」

「え？なに？」

ろれつが回らない様子で、また声もかすれているためよく聞き取れない。男はミサトの唇に顔を近づけた。

「こ、のあ、あく、ま」

「なるほどなるほど」

ミサトは眦から汗のようにだらだらと涙を流していた。前髪もべつとりと張り付き、丁寧に整えられていた後ろ髪も首筋に絡んでぐちゃぐちゃに乱れている。淫臭がすさまじく、大学時代一度だけ訪れた友人のヤリ部屋よりもひどかった。

「感想はどうか？こんな激しい絶頂なんてしたことないだろう？物理的にやろうと思ったならそれこそ他人の手を借りていつてるクリトリスを何度も何度も何時間もかけていじめ続けなきゃこまでの快楽にはならないんだぜ。よっぽど変な男に捕まえられた女じゃなきゃこんな快楽を経験することはできない。どう？病みつきになる？気持ち良すぎて気が狂いそうかい？」

「こ、こんなの、きもちいいわけないでしょ」

ミサトは息も絶え絶えになりながら、しかしそれでも反論してきた。

「え？そう？」

男は意外に思ってたミサトの瞳を覗き込んだ。嘘や恥じらいが見えるかと思えば、思いのほか強い意志がそこには宿っていて、男は興味をそそられる。

「どうして？絶頂の信号だよ？実際君のおまんこは愛液をだらだら舐みたいに流してるし、ほらこのびらびらはまっかつかで、今僕がちよつと触っただけでひくひく痙攣したよね？これが気持ちよくないって？」

男は無遠慮にミサトの膣口付近を指でいじくる。ミサトは身を固くして指の侵入を拒んだ。

「―――つきもちよくなかない！苦痛なだけ！体がぎゅってなって息ができなくて、頭ががってなって、それだけよ！！」

「ははあ、なるほどなるほど」

男はミサトの返答に何度もうなずき、パソコンの前に立った。ペンをさらさらと紙に走らせ、その計算結果を入力していく。

「それじゃ、これでやってみよう」

軽く言い放ってスイッチを押す。ミサトは一瞬先ほどの衝撃がくるかと身構えてびくりと震えたが、次の瞬間には縮こまるようにして身を固くした。

「つまり先ほどのやつはね、脳が快楽信号を十分に受け入れる体制が整っていなかったためにミサトちゃんの体だけが悦んで、精神がついていかなかったんだと思うんだ。どう？じわじわと湧き上がってくるだろう？下半身から背筋を通して脊髄、脳幹、目の奥、耳の奥」

ミサトは首を振った。拒絶しても信号は送られ続ける。膝がふるふると震えはじめ、顎もかたかたと上下する。

「気持ちよさそうだね？切なそうな顔をしている」

ミサトは眉根を寄せ、ぎゅつと目をつむって、頬を赤く染める。何とか意識を反らせようと頑張っているようだが、そんなものの機械の刺激にはかなわない次第に呼吸が途切れがちになり、齒を食いしばって何とか快楽をいきみ逃ししようと試行錯誤しているのがわかった。

足のつま先が丸まって、地面から浮く。膝が持ち上がり、腹筋が縮む。

「いい子だ、テンジヨウミサト。神様に祈りながらいきなよ。女性をこのような体につくりたもうた大いなる神様、感謝しますってね。クリトリスを刺激すれば気持ちよくなるように作った変態おじさん、あなたの望み通り気持ちよくなっていきますので見ててください」

「い
やつ
い
やつ
い
つ
い
ぐ、
い
ぐ、
い、
い、
い
ぐ
う
う
う
う」

男に耳元で自らの信仰心を冒とくされながらミサトは絶頂した。絶頂しながらじよろじよろと音を立てて失禁する。

「ははは、ウレシヨンか？お望み通り気持ちいい絶頂がもらえておしっこ漏らしちゃうほどうれしかったんだね？はは、歯をがちがち言わせてさ、よっばど気持ちいんだな」

「イっでるうううう、あ、イっでる、イっでる、とま、とまんないっ」

「そりやそうだよ。信号を強制的に送り続けてるわけだからね。とりあえず、一時間くらいイキ続けてみようか？」

「むりっむりですっおねがっどめでっもっうむりっ」

ミサトはいきながらも上目遣いで男を見上げ、懇願する。

「きもちいい？」

「はい、いいです。つきもちいいつ、だからつ、もう、いいがらつ、イッてるからつ、ずっと、イッてるのつむりつ!! あつあつ、
 まって、なんでつまたつ、イぐつイぐつ、イでるのにつ、イぐううううううつ」

今度は背筋を反らして絶頂した。

「い
やあああああつどめてよおつこれつどめてえっ」

煩悶しながら涙を流すが、唇は恍惚にわなないて、頬は快楽に弛緩し、完全にとろけた顔つきになっていた。

「うんうん、きもちいいねえ、しあわせだねえ」

「やだつやだつやだつ、ねえっ！　むりなんだつてばっ！　おねがいなんでもずるがらっ！　あつまたきちやうつ！　はやくどめでつ！！　イぐっ
イぐううううううう」

膝頭につくほど頭を垂れて、腰をよじりながらかくかくと震えた。愛液はもはや床まで滴るほどになっている。